

〈研究ノート〉

留学生と日本人学生の共修による地域文化理解・地域交流を柱とした体験学習型授業の構築

林 翠 芳

大 塚 薫

ガルシア デル サス エバ

要 旨

本研究課題の一つの目的は留学生と日本人学生の共修における相乗効果の構築であり、今一つは体験学習を通して地域文化を理解するとともに、地域の方と触れ合うことにより、学生の目線から地域の課題を見付け、地域の振興を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。一連の教育活動を通して、地域とともに生きる自覚を育み、地域の一員として活躍することにより、双方向往來の関係の樹立ひいては地域との互惠関係の構築につながると考えられる。

【キーワード】

留学生と日本人学生の国際共修、地域文化理解、地域交流、地域振興、体験学習、異文化理解

1. はじめに

本事業は、地域の大学に通う学生（留学生及び日本人学生）というリソースを地域の振興等に役立てることに主眼を置き、地域の方との交流や体験的な教育活動を通して高知の文化を学ぶとともに、学生（留学生及び日本人学生）の目線から地域の振興を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。本事業の実現、すなわち学生（留学生及び日本人学生）が地域の課題解決に参加するという一連の教育活動を通して、地域とともに生きる自覚を育み、地域の一員として活躍することにより、双方向往來の関係の樹立ひいては地域との互惠関係の構築につながると考えられる。

また、本事業で取り上げる体験的な教育活動の手法は、体験・実践を通して学生（留学生及び日本人学生）の企画力、行動力、コミュニケーション力、グローバルな視野等の基礎的・汎用的能力を培う効果があり、異なる文化、

異なる価値観にぶつかる社会体験を通じて、心身ともに鍛えられ、主体的な学びを促し、「教育の質的転換」が期待できると考えられる。

本研究課題は、2018年10月から12月にかけて地域課題に関する体験型プログラムの一環として、高知大学の共通教育において実施した「地域文化理解」の授業について考察を行ったものである。授業では単に体験授業を組み入れるだけでなく、事前・事後の学習のほか、体験学習において受講生（留学生及び日本人学生）自ら地域の方々と接するようにインタビューを仕掛けるとともに、受講生が地域の方との交流や体験活動を通して地域の活性化について考えてもらうことに重きを置いた内容であった。最終発表及び最終レポートは「私が考える高知の地域振興」、「高知観光発掘」の二つの課題について考えるものであった。

近年、国際共修に関する授業展開及び実践研究が増えてきており、佐藤他(2011)では「国際共修とは、単に留学生と日本人が机を並べて、同じ科目を履修するだけではなく、意図的な教育介入により、言語・文化背景の異なる学生同士が他者を理解し、己を見直し、新しい価値観の創造を自己成長へとつなげる学習体験である」と述べられている。本事業においても、一連の活動では留学生と日本人学生の国際共修の相乗効果を最大限に引き出すべく、教室での共同学習並びに校外での体験学習では留学生と日本人学生が共に学習内容を考え、そして共に活動できるように、グループごとの活動を中心にした。

2. 「地域文化理解」の授業概要

「地域文化理解」の授業は、2018年度第2学期に高知大学の共通教育科目「地域文化理解」の授業として「地域の方との交流や体験活動を通じた教育活動を通して、受講生（留学生及び日本人学生）に地域課題を理解してもらうとともに学生の目線から地域の振興を考え、地域活性化の糸口を探ることを目的」に開講された。16コマの授業において、高知の紹介の講義時に受講生に目的意識を持ってもらうために、学生団体「コンパス」が地域と一体となって行っている活動内容を紹介してもらった。これは、最終的に受講生自らが高知県の地域活性化のためにどのように役に立つことが可能かを考えてもらうきっかけとするためである。また、体験学習は三回実施し、体験学習の前に事前学習、体験学習実施後にグループごとに活動の振り返り、情報共有、よかった点・反省点等を話し合い、また各自紙ベースによる振り返りシートを提出してもらった。振り返りシートの提出は、授業の一環として組み入れ、

活動中の感想等を含め体験活動ごとに受講者全員に課した。各体験授業時には、地元の方との交流を促し、地域事情の理解を深めるためにインタビュー活動を実施した。その事前準備としてインタビューシートを配布し、インタビューの仕方やインタビューに対する挨拶、質問の回答に対する受け答えなどについて説明した後、グループごとにインタビューをし合い、設問内容を考案する予行練習を行った。また、体験学習実施後には、グループに分かれてインタビュー活動で得た回答内容をグループのメンバーで共有し合った。

＜表1＞ 「地域文化理解」の授業シラバス

実施日	授業内容	実施場所
10.03	共同学習 オリエンテーション、事前アンケート調査	学内（教室）
10.17	共同学習 インタビュー活動の準備	学内（教室）
10.21	体験学習（交流） ①アイスブレイキング（レクリエーション活動を通しての交流活動・高校生へのインタビュー活動・グループ内の役割を決める） ②グループワーク「昼食作り」地元の方と昼食を交えて交流（協力：安芸釜あげちりめん井楽会、安芸市漁協、ヘルスメイト） ③高校生による安芸市の観光ガイド ④振り返り活動（ポスターセッション）	学外（安芸市）
10.24	共同学習 ①高知紹介（1）授業担当者による高知地域に関する講義 ②10/21の体験学習の振り返り	学内（教室）
11.21	共同学習 ①高知紹介（2）学生団体「コンパス」代表による活動紹介 ②インタビュー活動の準備	学内（教室）
11.25	体験学習 ①高知城歴史博物館見学 ②高知城見学 ③日曜日見学 ④ひろめ市場にてインタビュー活動	学外（高知市内）
12.05	共同学習 ①11/25の振り返り ②授業担当者による郷土料理に関する講義 ③12/08の活動準備	学内（教室）
12.08	体験学習 ①地域文化学習 ②餅つき体験 ③地域住民へのインタビュー活動・交流	学外 （大豊町立川地区）
12.12	共同学習 ①12/08の振り返り ②ブレインストーミング法によるグループ発表の準備	学内（教室）
12.19	グループ発表 テーマ1：「私が考える高知の地域振興」 テーマ2：「高知観光発掘」 事後アンケート調査	学内（教室）
12.26	レポート提出 テーマ1：「私が考える高知の地域振興」 テーマ2：「高知観光発掘」	

また、本授業は留学生と日本人学生の共修を一つの柱として据えており、教室での共同学習並びに校外での体験学習では留学生と日本人学生が共に学習内容を考え、共に活動できるように、グループごとの活動を中心に据えた。そして、それぞれのグループの日本人学生がグループリーダーの役割を担ってもらった。

授業は表1のシラバスの通り実施された。なお、本授業を受講した留学生は15名で、内訳として、中国8名、韓国2名、インドネシア2名、モンゴル1名、台湾1名、タイ1名である。また、日本人学生5名（うち1名は中国籍）は、全員高知県外の出身である。

3. 体験学習の概要及び評価

3-1 安芸桜ヶ丘高校・安芸高校生徒との交流活動

安芸桜ヶ丘高校・安芸高校との交流活動は、「地域魅力再発見」をテーマに実施され、当日の交流並びに体験学習では、現地到着後、まず安芸高校にてアイスブレイキングに1時間ほど取り、(活動1)レクリエーション活動を通しての交流活動、(活動2)高校生へのインタビュー、(活動3)グループ内の役割決め、の三つの内容で行われた。その後、安芸釜あげちりめん井楽会、安芸市漁業協同組合、ヘルスマイト^{注1}の団体等の協力を得て、安芸市の特産物を使って一緒にちりめん井、ナスのたたき、カツオの薫焼きたたき作りを試食を兼ねて実施した。昼食後、高校生による安芸市の観光ガイドー野良時計、武家屋敷、岩崎弥太郎生家を見学し、その後、再び安芸高校に戻り振り返り活動を行った。振り返り活動では、一日の活動を通して、安芸市が地域おこしの面で抱える課題やその改善策を一緒に考え、地域振興をテーマに漢字一字でポスターを作成し、ポスターセッション形式でグループごとに発表し、その後相互評価を実施した。5グループからそれぞれ「賑」、「広」、「緑」、「元」、「魅」の漢字が選ばれ、「緑」豊かな安芸をさらに活力ある「元」気な町として「賑」えるように、そして、国内外の人に知ってもらえるように、インターネット等を通じて「広」くその「魅」力を伝えることが大事だ、と地元の高校と共に真剣に話し合った。

後日受講生から提出された振り返りシートの一部（5段階評価）を表2に示す。表2から読み取れるように、6を除き、全項目が平均点4ポイント以上を得ており、満足度が高いことが窺える。特に、2のインタビューした相手に対する理解、7の料理体験、8の一連の高校生との交流活動について高

い評価が得られた。

<表2> 安芸桜ヶ丘高校・安芸高校生徒との交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均
1	高校生との交流で自己紹介ができたか。	6	8	4	0	0	4.1
2	インタビューした相手のことがよく分かったか。	8	8	2	0	0	4.3
3	インタビューを通して、高校生とうまく交流ができたか。	8	5	4	1	0	4.1
4	今回の高校生との交流で安芸市のことがよく分かったか。	7	8	4	0	0	4.1
5	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか。	10	5	2	2	0	4.2
6	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか。	5	7	4	2	1	3.6
7	活動評価①料理体験	12	3	3	1	0	4.3
8	活動評価②高校生との交流(インタビュー活動・ゲーム)	10	7	2	0	0	4.4
9	活動評価③高校生による安芸市ツアーガイド	9	5	4	1	0	4.1
10	活動評価④高校生とのグループワーク(振り返り活動)	7	8	4	0	0	4.1

注1：5段階評価

よく分かった ← 5・4・3・2・1 → よく分からなかった

よくできた ← 5・4・3・2・1 → 上手にできなかった

注2：1名が欠席、1名が途中からの参加のため、上記回答は1～3は18名分、4～10は19名分

その他、記述のみの設問としては、「安芸市をより活性化するには何がポイントか」、「安芸市の観光について、どのようなところを改善したほうが良いか」、「安芸市の観光資源について何か提案があるか」、「今回の活動で何か困ったことがあったか」、「今回の体験学習で学んだこと、感じたことは何か」を設定した。

「安芸市の活性化」については、受講生から「安芸にわざわざ来る(止まってもらう)ようなプロモーションをしていくこと、そして、安芸ならではの魅力を発信していくこと(他の市に負けないポイント)」、「SNSなどを使って観光客を呼び込む」、「観光業をもっと推すべき」、「政策、福祉で若者を引き付けて安芸市での就職を促す。努力して観光業を発展させる」、「安芸市の文化遺産と名物を世界中に広めて宣伝する」、「人口が増えることは必要なポイント」、「交通手段の改善はポイント」等のアイデアが寄せられ、活性化には交通の改善や人口を増やすこと、また、安芸市ならではの魅力を県外や世界へ発信するという提案もあり、高校生との交流や一日の活動を通して気付いたことが記述されていた。

「安芸市の観光の改善」については、「外国語での案内、Wi-Fi、プロモーション、観光目的の体験、イベントを増やした方がいい」、「パンフレットをもっと出す」、「名所は解説があったらいい」、「観光ガイドの方が改善すると良い」、「車がないとなかなか行けないため、交通機関を改善すればいい」等の提案があった。

「安芸市の観光資源」については、「歴史的建造物や日本らしい景色を外国人向けに広めていくこと、文化体験を増やすこと」、「海が近いというところを利用すればいい。例えば、海の旅行など」、「YouTubeは今若い世代から大人まで見られるコンテンツなのでYouTubeの広告を使ってPRするのがいい」、「食をもっと広める」、「自然の観光地だけではなく、観光地についての文化産品もあったほうがいい」、「エンターテインメントのイベントが多くなると良い」等の提案があった。

その他、困ったこととして、「歴史、文化の紹介が少し分かりにくい」、「観光地に停まる時間が短い。歴史知識は難しい」等のメッセージが寄せられた。

3-2 高知城歴史博物館・高知城・日曜市^{注2}・ひろめ市場^{注3}の活動

高知城歴史博物館は、国宝や重要文化財を含め、土佐藩主山内家伝来の歴史資料や美術工芸品を中心に、土佐藩・高知県の郷土の偉人である坂本龍馬や板垣退助に関連する資料が展示されている。当日は、土佐の歴史年表や土佐国の絵地図が展示されている常設展のほかに企画展「幕末維新時代の群像展—土佐の社会と人物—」と特集展「歴史になった幕末維新一記憶から記録へ—」が開催されており、幕末維新という時代の転換期に郷土の偉人がいかに生き、行動したのかが想像できるゆかりの資料や作品について学芸員が詳細に解説してくれた。また、高知城では、ボランティアガイドが留学生にも分かりやすい言葉で高知城の由来や山内家の歴史、土佐に生きた人々の暮らし等を丁寧に説明してくれ、受講生の高知県に関する理解の手助けに大いに役立った。高知城の大手門から天守閣、展示室を観覧した後、江戸時代から続く日曜市を見学し、ひろめ市場にて各自地元の方や観光客に対してインタビューを実施した。

後日実施した振り返りシートの結果を表3に示す。8「高知城歴史博物館見学」と9「高知城見学」の評価は4.5以上であり、専門家の分かりやすいガイドの下、学生たちの理解が深まったことが分かる一方、4「高知城歴史博物館の説明に対する理解」が3.8、5「高知城の理解」が4.3であり、日本の歴

史的背景を理解していない学生にとっては歴史の用語も含めて多少難解であったことも窺われる。また、ひろめ市場でのインタビュー活動に関しては、地元の方や観光客にインタビューへの協力を仰いだ上で実施しなければならず、3「インタビューを通しての交流」の評価が3.8であり、苦勞してインタビューの相手を探して交流したことが分かる。

<表3> 高知城歴史博物館・高知城・日曜日・ひろめ市場の活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均
1	インタビューでインタビューの目的を上手に伝えられたか。	6	11	3	0	0	4.1
2	インタビューした相手のことがよく分かったか。	7	8	3	2	0	4.0
3	インタビューを通して、地元の方とうまく交流ができたか。	4	9	6	1	0	3.8
4	高知城歴史博物館の説明を聞いて分かったか。	6	5	7	2	0	3.8
5	高知城を見学して高知城のことがよく分かったか。	9	8	1	1	0	4.3
6	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか。	9	5	3	1	1	4.0
7	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか。	5	3	3	5	3	3.1
8	活動評価①高知城歴史博物館見学	10	7	2	0	0	4.5
9	活動評価②高知城見学	13	5	1	0	0	4.6
10	活動評価③ひろめ市場or日曜日インタビュー	10	7	2	1	0	4.3

注1：5段階評価

よく分かった ← 5・4・3・2・1 → よく分からなかった

よくできた ← 5・4・3・2・1 → 上手にできなかった

理解できた ← 5・4・3・2・1 → 理解できなかった

注2：20名のうち、4～9の設問については1名が無記入のため、19名分

その他、記述のみの設問としては、「高知市街の活性化には何がポイントか」、「高知市の観光について、どのようなところを改善したほうが良いか」、「高知市の観光資源について何か提案があるか」、「今回の活動で何か困ったことがあったか」、「今回の体験学習で感じたこと、思ったことは何か」がある。

「高知市街の活性化」の質問に対しては、「もっと高知に"わざわざ"来たくなるような理由をアピールすること」、「交通手段を豊富にすること」、「今ある資源の活用」、「活気あふれるイベントが必要」、「若い人が好きなブランドを引き入れる。人を集められる場所を増加させる」、「イベントを増やしたらいい」、「人が休憩できる場所は重要。休憩できる場所があれば、人も集まる」等の提案が寄せられた。イベントの開催等が町の活性化に繋がるとの

提案も多く、また、「今くらいなら適当だと思う」、「充分人も多かったと思う。他県の人の意見ではあるが、高知城をPRするのが一番だと思う」のようなコメントもあった。

「高知市の観光についての改善点」の質問に対しては、「観光バスの情報をもっと人に知られるようにしたらいい」、「宣伝が足りない」、「外国人に対して通訳や英語表記は必要かもしれない」、「交通等をよくした方がいいのではないかと思う」等の提案があった。また、「インタビューしてくれた方もそう話しましたが、トイレの数を増やしてくれればいい」というような提案が出され、外国語の対応強化が留学生の目線ならではの提案ではないかと思われる。

「高知市の観光資源への提案」の質問に対しては、「あるものを活かすこと」、「城を活かすべき」、「食べ物をもっと押し出す」、「交通を充実させたい」、「高知市の海がきれいなので、もっとビーチのリゾートを開発することがいい」、「自然の景色をポイントにする」、「自然がとてもいい、リラックスしやすい地域だと思う」、「宣伝の方面に力を入れる」等の提言があり、高知の自然の良さをもっとアピールすべきという提言が比較的多く、既存のものの活用が一つのポイントであると考えられよう。

「今回の体験学習で感じたこと、思ったこと」については、「自分がよく訪れる高知市内の魅力に改めて気づけて良かった」、「高知に来て1年半になってもあまり気づかなかったこともあった。そういうところも今回気づき、高知のいいところをもっと見た」、「高知城あたりは活発だった」、「高知のことをもっと知ることができた」、「インタビューを通して、高知の魅力を再確認できた」、「この体験学習を通じて、高知城の歴史や地元の方などの話がよく分かった。本当に楽しい」、「今回の体験はとても有意義だと思う。もしきっかけがあったら、もう一回参加したい」、「もっと高知の歴史に関する知識が分かった。地元の人との交流もし、満足した!」、「高知市のことをもっと詳しく知るようになった」等のメッセージが寄せられ、日頃接している景色や風景であっても、体験学習という視点を通して、高知の魅力や良さに気付いたことで、体験学習としての効果が十分得られたのではないかと思われる。

3-3 大豊町の交流活動

大豊町立川地区における地域住民との交流活動は地域住民並びに大豊町町役場の協力を得て実現したものであり、当日は「伝統文化の体験・学習や地

域住民との交流」をテーマに行われた。現地（立川刈谷集会所）到着後、まずオリエンテーションが行われ、地域と留学生それぞれの代表の挨拶が行われた後、地域の方から餅つきの話があり、その後、餅つき体験が行われた。昼食としては体験で作られたお餅の試食と地域の食材を用いて地域の方が作られた昼食をいただいた後、学生が地域の方へのインタビューを実施した。その後、地域の方から参勤交代の歴史についてビデオを交えて紹介していただいた後、立川番所を見学した。

＜表4＞ 大豊町の交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均
1	大豊町の地元の方との交流で自己紹介ができたか。	12	4	0	0	0	4.7
2	インタビューした相手のことがよく分かったか。	7	8	1	0	0	4.3
3	インタビューを通して、地元の方とうまく交流ができたか。	10	5	1	0	0	4.5
4	今回の大豊町の地元の方との交流で大豊町のことがよく分かったか。	8	6	1	0	0	4.4
5	餅つきの話や餅つき体験により日本の文化がよく理解できたか。	9	5	2	0	0	4.4
6	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか。	10	5	1	0	0	4.5
7	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか。	4	5	4	3	0	3.6
8	活動評価①餅つき体験	14	2	0	0	0	4.8
9	活動評価②大豊町地元の方との交流	13	3	0	0	0	4.8
10	活動評価③立川番所見学・地域の方による参勤交代の歴史の話	6	6	3	0	1	4.0

注1：5段階評価

よく分かった ← 5・4・3・2・1 → よく分からなかった

よくできた ← 5・4・3・2・1 → 上手にできなかった

注2：4名が欠席のため、16名分、また設問4については1名無記入のため、15名分

表4の評価で読み取れるように、項目7を除き、その他の評価はいずれも4ポイント以上の評価になっている。特に項目1、8、9の体験学習並びに地域との交流に対する満足度が高く、インタビューを通しての交流活動が功を奏したと考えられる。項目10の評価がやや低めであるが、当日は山の上の気温が低く、室外での見学は寒かったとのコメントがあり、活動よりも寒さに気を取られてしまった感が強く、今後は本活動の実施時期についての見直しが必要であると思われる。

その他、記述のみの設問としては、「大豊町をより活性化するには何がポイ

ントか」、「大豊町の観光について、どのようなところを改善したほうが良いか」、「大豊町の観光資源について何か提案があるか」、「今回の体験学習を振り返って感じたこと、思ったことは何か」等が挙げられる。

「大豊町をより活性化するポイント」については、「若者が町へでていくのを防ぐこと」、「特産物を上手く利用すると良い」、「少子化の問題は厳しい。人が増える政策をすると活性化する可能性がある」、「若い人がポイントだと思う」、「1番目は若者が高知で働くサポートをする」、「交通をもっと便利にすること」等のコメントが寄せられ、人を増やす、特に若者人口を増やす必要があるとのコメントが多かった。

「大豊町の観光改善」については、「バスのアクセスを増やすこと」、「観光場所に外国語のパンフレットがあれば良くなる」、「イベントを増やした方がいい」等、外国語のパンフレットやイベントを増やすアイデアは若い人・留学生ならではの目線が感じられる提案であった。

「大豊町の観光資源への提案」については、「PRしても人が集まるほどのものではないのでやはり観光資源を新たに作るべきだ」、「インターネットを上手く使って遠くの人とつながってやっていくこと」、「観光地で外国語を添付すること」、「山や湖がとてもきれいなので、これを強みとする」、「山と森林などの自然資源をよく利用した方がいい」、「歴史文化の教育はとても重要で、もっと博物館を建設した方がいい」、「餅つきやいろいろな家庭的なイベントも観光資源の一部にしたらい、「山の資源をもっと利用すること」、「農作業を体験すること」「①日本伝統民家生活体験（食・宿付き）②～大豊町の昔を探す～地方人文の旅（食・交通付き）」等の提案があり、大豊町の美しい自然の活用のほか、体験型観光等の提案はアイデア溢れるものであった。

「今回の体験学習を振り返って感じたこと、思ったこと」については、「留学生として、地元の方と一緒に、地元の良い文化を広めることができれば、それは素晴らしいことだ」、「大豊町にまた行きたい」、「餅つきの作り方も地元の人々との交流も立川番所見学もすべて価値がある」、「大豊町の自然環境も素晴らしいし、歴史や文化も豊富だし、地元の方もやさしいですが、大豊町の豊かさを知っている人はそんなに多くないのが、残念だった」、「大豊町に住んでいる皆様は全員優しいということが分かって、また機会があれば是非行かせていただきたい」等の感想が寄せられた。また、日本人学生から「今までで一番地域の方と触れ合う機会が多かったので楽しかったですし、留学生で話せる人も増えたので良かった」という留学生との交流に関する感想が

寄せられ、体験型授業における留学生と日本人学生の共修が効果的であったことが窺える。

3-4 体験学習の平均評価

表5は表2、表3、表4から体験学習の評価の平均値のみを抽出したものである。体験内容により、質問の内容に少し違いがあるが、大きな相違はない。1の「インタビューの目的の伝達」の平均値はいずれも4.1以上あり、特に「大豊町における体験学習」で評価が高いのはインタビューが3回目であることや、インタビューに協力してくれた相手が留学生との交流を目的に参加してくれた地元の方々に、一緒に昼食を取り、その後室内で落ち着いて話ができただけではないかと考えられる。それに対して、高校生に対するインタビューは初回の体験であったこと、また、ひろめ市場でのインタビューでは各自インタビューの相手を見付けなければならなかったため、双方とも4.1という評価であった。そのような条件のもとで、受講生たちはよく頑張っているインタビューの目的を伝え、インタビューに協力してもらったと思われる。

2の「相手に対する理解」と3の「インタビューした相手との交流」は「高知城等における体験学習」の設問3を除き、平均値は4.0以上あり、インタビューが丁寧にインタビューに答えてくれたことがうかがえる。中でも「大豊町における体験学習」の交流の平均値が他の2件の体験学習の交流よりも評価が高かったのは交流環境が最も整っていたことが功を奏したと思われる。それに対して、ひろめ市場でのインタビューでは、自らインタビューの相手を見付けなければならないという厳しい条件であったことやじっくり話をするのが難しい環境にあったのではないかと考えられる。また、「安芸市における体験学習」では次の活動時間が押していたことも一因であろう。

4と5に関して、4の「高知城歴史博物館の説明」については、「詳しく話していただいた」、「学芸員の説明はとても丁寧だった」というコメントがある一方、「説明の内容は少し難しい」、「難しい言葉とよく分からない歴史の内容があった」、「歴史の知識があまりないので難しかった」等の感想にあるように、歴史背景が分からないと難しかったのではないかと考えられる。それ以外の体験学習はいずれも4.1以上の評価を得ており、体験活動を通しての学習により地域文化に対する理解が深まったことが読み取れる。

<表5> 体験学習の平均評価

NO	安芸市における体験学習	平均	高知城等における体験学習	平均	大豊町における体験学習	平均
1	高校生との交流で自己紹介ができたか。	4.1	インタビューでインタビューの目的を上手に伝えられたか。	4.1	大豊町の地元の方との交流で自己紹介ができたか。	4.7
2	インタビューした相手のことがよく分かったか。	4.3	インタビューした相手のことがよく分かったか。	4.0	インタビューした相手のことがよく分かったか。	4.3
3	インタビューを通して、高校生とうまく交流ができたか。	4.1	インタビューを通して、地元の方とうまく交流ができたか。	3.8	インタビューを通して地元の方とうまく交流ができたか。	4.5
4	今回の高校生との交流で安芸市のことがよく分かったか。	4.1	高知城歴史博物館の説明を聞いて分かったか。	3.8	今回の大豊町の地元の方との交流で大豊町のことがよく分かったか。	4.4
5			高知城を見学して高知城のことがよく分かったか。	4.3	餅つきの話や餅つき体験により日本の文化がよく理解できたか。	4.4
6	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか。	4.2	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか。	4.0	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか。	4.5
7	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか。	3.6	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか。	3.1	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか。	3.6
8	活動評価①料理体験	4.3			活動評価①餅つき体験	4.8
9	活動評価②高校生との交流(インタビュー活動・ゲーム)	4.4	活動評価③ひろめ市場・日曜市インタビュー	4.3	活動評価②大豊町地元の方との交流(インタビュー活動含む)	4.8
10	活動評価③高校生による安芸市ツアーガイド	4.1	活動評価①高知城歴史博物館見学 活動評価②高知城見学	4.5 4.6	活動評価③立川番所見学・地域の方による参勤交代の歴史の話	4.0
11	活動評価④高校生とのグループワーク(振り返り活動)	4.1				

6と7に関しては、今回の受講者20名のうち15名が留学生、5名が日本人学生であり、日本人学生数が少ないことから、他の日本人学生との交流機会が自ずと少なくなったこと、また、体験学習では5グループに分かれての行動となり、それぞれの日本人学生が各グループ1名の状況になっていたことも評価係数が低かった大きな理由になっていると考えられる。

8～11に関しては、評価がいずれも4.0以上あり、体験学習に関する満足度が高いことが窺える。

4. グループ発表

最終発表は五つのグループに分かれて、「私が考える高知の地域振興」と「高知観光発掘」の二つのテーマから一つ選び、体験学習も含め、高知に来て経験したことや感じたこと、考えたこと等について発表してもらった。

Aグループは「私が考える高知地域振興」をテーマに、台湾鳳林地域の例を挙げ、スローシティ^{注4}への加入を提案した。また、スローシティへの加入条件としては、①認証地域の人口は5万人以下であること、②州や地方の首都ではないこと、③地元の食文化を持っていること、④環境を守ることを重視していること、⑤経済活性化や観光を直接目的としているものでなく、より良い住民生活に向かうことの5点を挙げ、開発を抑えつつ持続的な発展を目指すとともに、地域の文化や伝統を守り、生活のリズムを変えずに地域経済を豊かにしていく街づくりという高知地域の中山間部の振興に適した提案をしてくれた。発表のしめくりに「幸せな生活を送っている市民が住むまちには、自然に人が集まる」と述べ、自信に満ちた発表が行われ、グループのメンバーが真剣に課題に取り組んだことが窺えた。

Bグループは「地域振興による町おこしの提案」をテーマに、「県内のバスや電車が少ない。そのため、車がないと、どこかに行くのが難しい」、「映画館やデパートが少ない」、「朝や夜でも開いているお店が少ない」、「英語や写真があるメニューがほとんどの店にない」、「県内の交通案内があまりない。例えば、バスや電車の乗り方や時刻表はバス停には英語がないため、どうやって使うか分からない」等の改善点を挙げた。また、「坂本龍馬の出身地」であることや「自然が豊か」、「心穏やかなライフスタイル」を活かし、「高知県の人親切」であることをアピールできるのではないかと提案した。

Cグループは「高知地域振興」のテーマで、「放送局を活用して、県内の有名な代表的な人を集めて、高知県のコマーシャルを製作して、テレビCMや

YouTubeに放映する」、「高知大学や県立大学の留学生と協力し、観光地ごとに各種言語に翻訳して、分かりやすい看板と地図を作る」、「『分かりやすいデザイン』や特定の情報を絵文字で表現した『ピクトグラム』により、多言語表記した地図や注意書き、案内版などにイラストを添えたり、国際的に認知されている世界共通のマークを用いたりすることで、幅広い国籍の訪日客に理解してもらう」、また、「宝探しのイベント企画としてある種の『イースターエッグハント』を企画し、宝物をマスコットや珍しい食べ物のような高知特産品に変えて実施する。ノーマルレベルとハードレベルに分け、ノーマルレベルは子供や高齢者向けで、簡単なトラックで探しやすい宝物、ハードレベルは若者向けにし、難しいトラックで探しにくい宝物を設定する」といった提案もあった。

Dグループは「高知の魅力発見」のテーマで、「空いている家を民宿として利用する」、「高知のユニークなイベントをより多くの人に知ってもらう」、「若者たちが来やすい水族館など高知の特徴を出しやすい建物を建てる」、「企業が地元出身者や地元大学の卒業生を採用する」、「有名な人に来てもらって観光スポットを紹介してもらう」等の提案があった。

Eグループは「観光発掘のためのアイデア」として、「Free Wi-Fiを高知県内の観光スポットで普及させる」、「対象者向けの観光バスツアー、多言語での案内」、「路面電車の支払い方法の改善（短期利用のICカード使用）」、「あえて他の県より先駆けて実施するオンラインマネーの普及」等の提案があった。

以上のような提案を実現するには地方自治体、県民・市民の協力、民間団体等の協力が不可欠なものが多いが、アイデアや提案自体はいずれも高知振興に繋がるものであると思われる。

受講生からは特に交通の便について不便を感じる声が多く、Cグループから「観光客に対して、観光バスを提供する。観光バスで、人気のあるスポットをつないで、日帰りコースが生まれ、一人でも気軽に利用できるようになれば、観光の利便性を向上させることもでき、自分の旅行をカスタマイズする問題に対しても心配がなくなる」という提案があったが、現在高知市ではMy遊バス^{注5}が走っているので、今後の授業の中で紹介すべきだと受講生の提案を見て気づかされた。

5. 終了アンケート結果

授業終了時に実施したアンケートでは、受講生から概ね高い評価が得られ

た。特に、表6の1の「授業を受けて、地域・文化理解に対して理解が深まったか」については4.7と高く、受講生から「よく分からなかった地域文化についてたくさん学んだ」、「高知という県の特色についてよく学ぶ機会になった」、「色々な所に行って見学した」、「地元の人々とのコミュニケーションを通して地域文化に対して理解が深まった」、「いろいろな地域に行って、その文化や歴史を体験して、その文化に対する理解が深まった」等のコメントが寄せられた。また、日本人学生からも「今まで行ったことがない安芸市や高知城の天守閣に行き、新たな発見があった」、「たくさんの人や地域の魅力を知ることができた」、「地域文化の大事さが分かった」、「地域の人との交流によって高知をさらに一歩深く知ることができた」というコメントが寄せられ、好評も得られた。

2の「一連の活動を通して、高知の地元の人々との交流はできたか」については、「インタビューの時間などに交流できた」、「活動を通して交流できた」、「アンケートなどの調査を行うことで地元の人と交流ができた」、「インタビューなどの交流活動も上手くできた」、「高校生から地元のお年寄り方まで会って話して楽しい時間だった」、「インタビューを通じて、話した」、「インタビューによって、高知の人とたくさん交流した」等のコメントがあり、インタビューが交流のきっかけとなり、交流が深められたと考えられる。また、「授業を通じて、高知の地元の人と交流することができたが、やはりもっと話したいなあという気持ちが強く、もっと話す時間がもてたらいい」という感想もあり、交流の大切さを改めて考えさせられた。

3の「高知の地元の人々との交流を通して、地域住民への理解が深まったか」については、「交流を通してその地域住民と色々話したり、地元についてどう考えているのかなど話してみたりしたため深まったと思う」、「地元住民の方々への地元への思いや考えを知ることができた(特に大豊町で)」、「高知の抱える問題が少子化だけではないことが分かった」、「インタビューを通じて、いろいろな地元のことを初めて知った」、「インタビューをいろいろな人にして、地域住民への理解が深まった」、といったコメントが寄せられ、設問2と同様、地域住民への理解の深化にはインタビューが一定の功を奏していると考えられる。また、「簡単に言うと高知のことに興味を与えられた」のようなコメントもあった。

このように、体験学習を通して地域文化に対する理解が深まったと同時に、地域の方々と交流ができたことで本課題の取組みが有効であったと言える。

また、3回に渡って実施した体験学習の個別の評価についても4.6、4.2、4.3といずれも高い評価が得られた。

<表6> 終了アンケートの評価の平均

NO	内容	5	4	3	2	1	平均
1	「地域文化理解」の授業を受けて、地域文化に対して理解が深まったか。	15	5	0	0	0	4.7
2	一連の活動を通して、高知の地元の人々との交流はできたか。	13	6	1	0	0	4.6
3	高知の地元の人々との交流を通して、地域住民への理解が深まったか。	12	4	3	1	0	4.3
4	一連の活動を通して、(他の)留学生との交流はできたか。	12	8	0	0	0	4.6
5	他の留学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか。	7	5	6	2	0	3.8
6	一連の活動を通して、(他の)日本人学生との交流はできたか。	4	8	3	3	1	3.6
7	(他の)日本人学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか。	5	7	5	1	2	3.6
8	今回の一連の授業の活動の満足度の5段階評価	12	7	1	0	0	4.5
9	① 安芸特産料理体験・安芸観光・高校生との交流	14	3	2	0	0	4.6
	② 高知城歴史博物館・高知城見学・日曜市・ひろめ市場	9	5	5	0	0	4.2
	③ 餅つき体験・立川番所見学・大豊町民との交流	11	5	0	0	0	4.3

注1：5段階評価

十分 ← 5・4・3・2・1 → 不十分

理解が深まった ← 5・4・3・2・1 → 理解が深まらなかった

注2：1～8の設問は20名分、9は体験授業に不参加の受講生がいるため、①と②は19名分、③は16名分

その他の記述式質問に対する回答であるが、「授業の取組みとしてのインタビュー調査において困ったこと」については、「住民は時々、当地の方言で話しましたが、分からない言葉がいつも出てきた。少し困った」、「外でインタビューをすることはとても難しかった。話すのは平気だが、最初に話しかけるのは難しかった」等のコメントや、「インタビュー時間は少し短い。もう少し時間が欲しい」のような意見もあった。

また、「高知を観光して困った点」については、「交通アクセスの悪さ、グルメ以外の娯楽が少ない」、「交通機関が一番困った点だ。特に、学生や留学生にとってはほとんど車もないから電車かバスになる。しかし、高知で観光するとしたら車でしかなか行けない所が多い」、「路面電車の乗り方、交

通手段の不足」、「交通手段が少なく、若者が楽しめる場所が足りない」、「市以外の地域の電波と交通の問題」、「道に外国語の標識が非常に少ないが、少し不便だと思う」等のように交通が不便であると感じているコメントが多かった。高知県は東から西に長く、中心部の高知市内は電車やバスのような交通網が発達しているが、その他の地域へのアクセスが悪く、通信・交通インフラの整備や公共施設の充実が求められていることが分かる。

さらに、「高知観光の改善点」については、上記「高知を観光して困った点」と同様、「公共の移動手段を増やすべき」、「高速道路を端から端まで開通すべき」、「交通の状況を改善すること、交通線路を増やすこと、レンタル自転車を設けること、高知市と県内の他の地域間を結ぶための電車、バスを増やすこと、時刻表を調べるためのホームページを作ること」等の交通インフラの整備の意見のほか、「例えば、五台山や四国カルストなど遠くてもバスや電車で行けるような環境を作れば良い。また、ひろめ市場の場合は、席を見つけるのが大変なため、待つ時間を知らせたり、テーブル上に店のQRコードをはって探しやすくしてあげたりすると良い」、「知名度については、やはりいろいろな宣伝手段を有効活用することが必要だと思う。わかりやすい看板や地図を作るのもいい」、「芸能人にきてもらって紹介してもらおう。龍馬パスポートのようなものをもっと増やすべき」、「観光スポットの案内内容サービスを強化する。やさしい日本語を使い、外国語の案内を増やす」のようなPR提案、QRコードの導入、多言語による案内表示やガイドの工夫等「優しいまちづくり」への提案が上がってきている。

そして、「学生が目線から高知の観光資源への提案」については、「高知の魅力は沢山あると感じている。しかし、あまり知られておらず、来ても魅力的なきれいな所へ行きたいとき行く方法は困難だと思った。ですから、観光客にサービスするシステムがもっと改善すればいい」、「PRが足りないので若い年齢層へ絞って行くとよい」、「もっと太平洋を使ってのアドベンチャーな活動を行うべきだと思った」、「このまま自然をポイントにするが、もっと宣伝が必要だと思う」等、観光客に対するサービスの向上や高知の自然の有効活用のほか、若者が楽しめる施設やイベントの開発という声が多かった。

最後に、「その他、気づいたこと」については、「色々で経験になった。知らなかった日本の文化を習えて嬉しかった。韓国に帰っても忘れられないと思う」、「地域文化理解の過程を通じて、高知県内の色々な美しい景色が見え、インタビューで地元の方とよく交流した。地元の文化に対して理解が深まり

つつ、地域のいいところや問題点がよく分かった」、「見て、やって、学ぶことが本当に楽しい。このような授業はあまりないからだ」、「来学期もこの授業を続けてほしい」といった授業に対するコメントが寄せられた。

6. 終わりに

2017年度に試行的に授業担当者が所属する国際連携推進センターで開講した体験型授業「地域文化理解」は、2018年度には大学の共通教育の教養科目として開講することになり、授業が単位化されたこと、留学生と日本人学生の国際共修を主眼に据えたことが大きな変更点である。また、体験学習において、地域住民との交流を強化した点も本事業の一つの特徴である。

日本人学生から「授業を通して、留学生視点での高知を知れたことが新しい発見に繋がった。もっと早い段階で（2回生くらいで）この授業を取りたかった」という感想が寄せられた。また、留学生から「この授業を通して、ほかの留学生や日本人学生ともよく交流ができた。高知の歴史や生活への理解が深まった」との感想が寄せられ、国際共修を通して他文化理解の深化に繋がったと考えられる。

最後に提出してもらったレポートには、高知が自然豊かな町であることや交流を通して高知の人の人情溢れる温かさを強く感じたと述べた学生が多く、中には高知の豊かな自然と高知の人の温かさを売りに高知の地域振興に対する提案があった。ここにその一部を紹介する。

<中国留学生のレポート>

高知の魅力は自然と人という2つの方面にある。高知は自然が非常に豊かな都市として、空気が澄んでいてきれいであり、果物や魚類の種類も多く、日本最後の清流四万十川もある。人情の面では、高知の人々は親切で友好的であり、何度も取材活動をしてきた中で、私が出会った高知のインタビューをしてくれた方全てがとても熱心な喋り方で、会話を喜んでおり、異文化コミュニケーションが好きで、毎回のコミュニケーションがとても面白さと温かさを感じさせてくれた。高知は、緩やかな生活にふさわしい桃源郷といえる。

自然については、高知は宣伝を強化しなければならない。自然美あふれる宣伝映画を作り、NHK、テレビ東京など人気があるメディアのプラットフォームや日本の観光番組で放送したほうがよい。

次に、高知の独特な人情味を活かし、体験活動を開発することができる。例えば、大豊町のようなところで農家体験ハウスを建て、大都市でストレスを感じている人たちが自然と素の自分に戻れる場所にし、引きつけるのだ。以前私が参加したホストファミリーの活動のように、人々が本当の田舎の家庭に住んで、農作業や特別な田舎料理を体験させる。

<モンゴル留学生のレポート>

安芸市に行って交流した時、高校生たちと話しているとみんなが「何もない高知にどうして来たんですか」とよく聞かれた。その時、私は「何もないということないでしょう！ 高知の魅力はたくさんありますよ！」と答えると、不安そうな顔で見ていた。そこで感じたことは、若者たちがみんなそう思っており、外国人が来てもこのようなことを聞くのは少し寂しく思った。なぜなら、どこの地域でも魅力、特徴があり、それをさらに改善して紹介し、多くの人々に知ってもらうこと、また外国人や県外の人に「何もないところに何で来たか」と聞くのではなく高知のいいところは何か、魅力や特徴は何だと思えるかなどを聞いて参考にしていくことが重要なものと思ったからだ。私にとって高知の魅力は自然が美しいことと食べ物おいしいということだと思える。そのため、他の県と異なり、特徴を見せるようなものが重要だとも考える。例えば、安芸市の場合は「ちりめん丼」が有名であるため、観光客は自分たちで「じゃこ」を海に行き、取ってきて、自身で料理を作って食べる体験ができるような活動があれば観光客も増加すると考える。

このような地域振興に繋がるアイデアを活かすことができれば、本事業の目的である地域の活性化に寄与するとともに、双方向往來の関係の樹立については地域との互恵関係が徐々に構築していけるのではないかと考える。

また、安芸市の地元の高校生から「何もない高知にどうして来たんですか」との質問に留学生が驚いたという経験談には考えさせられるものがある。上述のごとく、受講生の多くは高知が自然豊かな町であることや高知の人が人情深く、温かいと感じている一方、地元の方が「灯台下暗し」の状況から、自分たちが住んでいる町—高知の良さや魅力に気づき、今後の地域振興への自信に繋がることができれば、まさに異文化交流の醍醐味に尽きると言えよう。安芸桜ヶ丘高校の教諭から、高校生が留学生と接するだけでも国際理

解に繋がると仰っていただいたお言葉に改めて頷けるものがある。このように、今後も学生と地元の住民との交流を通して、お互いに自分たちの地域文化に関する気付きを得ることで、地域の活性化の一助となるような授業の構築を目指して精査した上で改善を重ねていきたい。

付記

本プログラムは、大学から「大学機能強化促進経費」の支援を受け、実施された。

注

1. ヘルスメイトとは、「私たちの健康は私たちの手で」をスローガンに、食を通じた健康づくり活動をすすめるボランティアである。
2. 高知市のホームページによると、「日曜市」について「元禄3年（1690年）以来、300年以上の歴史を持つ土佐の日曜市。年末年始とよさこい祭り期間を除く毎週日曜日開催されています。4月から9月は午前5時から午後6時まで、10月から3月は午前5時30分から午後5時まで、高知のお城下追手筋において、全長約1300mにわたり、約420店が軒を並べています。新鮮な野菜や果物はもちろん、金物、打ち刃物、植木なども売られており、市民と県外からの観光客などもあわせると1日に約17000人が訪れる生活市です」と述べられている。

高知市ホームページ <http://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/39/nichiyouchi.html>

3. 高知市ホームページによると、「ひろめ市場」について「土佐藩家老の屋敷跡付近にあり、屋敷が消えた維新後もその一帯は親しみを込めて『弘人屋敷（ひろめやしき）』と呼ばれていたことから、その名をとり『ひろめ市場』と名づけられました。ひろめ市場の中は『お城下広場』や『龍馬通り』など7ブロックからなり、鮮魚店や精肉店、雑貨・洋服屋、飲食店など、個性的なお店が集まっています。市場内の至る所にテーブルと椅子が並べられていて、それぞれ自分の好きなものを、好きなお店で買ってきて、持ち寄って食べるスタイルとなっています。なので市場内のほとんどの飲食店にはテーブルがありません。食事後は食器をまとめておけばスタッフがすべて回収してくれます。食べる・買う・見る・遊ぶ…と、楽しみ方は無限大。自分に合わせた楽しみ方ができます」と書かれている。

高知市ホームページ <http://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/39/hirome.html>

4. Weblio辞典によると、スローシティとは「イタリアで起こったスローフード・スローライフ運動から発展した地域文化顕彰活動。シンボルマークはカタツムリ。日本では気仙沼市が唯一加盟している」とある。

5. JR高知駅を起点に、はりまや橋、牧野植物園、桂浜など高知市内の観光スポットを回る周遊バス。

参考文献

- 林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ (2017) 「体験学習を通じたアクティブ・ラーニング型授業の構築」『高知大学留学生教育』第11号、pp.77-90
- 宮本美能 (2015) 「留学生と日本人学生の国際共修授業における一考察 : 言語の問題へのアプローチと学習効果」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』41、pp.173-191
- 大塚薫・林翠芳 (2018) 「インタビューによる地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築」『第23回 JAISE 年次大会 (研究大会・総会) proceedings』pp.#32-5-1-2
- 大塚薫・林翠芳 (2017) 「グローバルな視点に基づいた体験型プログラムの構築—地域文化・観光体験調査の結果を通して—」『韓国日本語学会第35回国際学術発表大会論文集』、pp.115-120
- 大塚薫・林翠芳 (2016) 「日韓中協定校体験型プログラムの実践と課題—高知文化事情に触れる体験を通して—」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会論文集』、pp.100-105
- 佐藤勢紀子・末松和子・曾根原理・桐原健真・上原聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子(2011) 「共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設 : 留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第6巻、pp.143-156
- 島崎薫 (2018) 「地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのか—仙台すずめ踊りの実践を通して—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第4号、pp.397-406
- 島崎薫 (2017) 「地域住民との国際共修—留学生のアイデンティティの変化に着目して—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第3号、pp.227-237
- 末松和子 (2014) 「キャンパスに共生社会を創る—留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて—」ウェブマガジン『留学生交流』Vol42、pp.11-21

LIN Cuifang

(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門教授)

おおつか かおる

(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門准教授)

GARCIA del Saz Eva

(高知大学国際連携推進センター国際プロジェクト部門助教)